

連続講演会「東京で学ぶ 京大の知」シリーズ17  
変動する社会と激変する自然災害 第2回

## 災害リスク・コミュニケーションの新しいかたち

### — 想定を活かすために —

京都大学が東京・品川の「京都大学東京オフィス」で開く連続講演会「東京で学ぶ 京大の知」のシリーズ17「変動する社会と激変する自然災害」。3月12日の第2回講演では、防災研究所の矢守克也教授が「災害リスク・コミュニケーションの新しいかたち—想定を活かすために—」と題して、リスクを正しく受け止め、対策につなげてもらうために必要な伝え方について、具体的な手法を紹介した。

### ●2つの短歌に見る巨大想定之功罪



自然災害の実態解明や、災害低減を図る研究を行う京都大学防災研究所。約100人の所属教員のうち、自然災害にさらされる人間社会の側にとって必要な備えや情報システム、教育・啓発活動を主に研究する教員が2人だけいる。その1人が、矢守克也教授だ。

さまざまな手法を開発している。

「想定をリスクに変えることなく、想定を活かすために、どんなリスク・コミュニケーションが必要か考えてみたい」と矢守教授

本日のテーマ「災害リスク・コミュニケーション」とは、災害に関するリスクについて情報や意見を交換し、理解を深めること。矢守教授は災害リスク・コミュニケーションの新しいかたちを模索して、さ

「まず、災害リスク・コミュニケーションがなぜ大切なのかを説明するために、2つの短歌をご紹介します」

- ・大津波 来たらば共に 死んでやる 今日も息が言う 足萎え吾に
- ・この命 落としはせぬと 足萎えの 我は行きたり 避難訓練

この 2 首に込められた思いには大きな違いがあるが、両者とも南海トラフ地震による津波高が全国最大の 34m と想定された高知県黒潮町に住む 80 代の女性が詠んだものだ。

前者に表現されているのは、強大な津波の脅威に対する絶望やあきらめだ。「リスクの想定そのものが、かえってリスクとして働いてしまう、つまり“リスクの想定”が“想定リスク”に変わってしまうことを示しています」

一方、後者には「避難訓練に参加して自分の命は自分で守る」という強い気持ちが表現されている。この女性は 2014 年 3 月の伊予灘地震の際も、しっかり避難されたという。

前者の歌から数カ月後に後者の歌が詠まれたのだが、なぜこのように気持ちが変わったのだろうか。

黒潮町は被害想定を前に、一時はあきらめムードが漂っていたのだが、若い町長を筆頭に、避難タワーの建設や独自の避難カルテの作成など、町をあげて防災に取り組んできた。それが功を奏し、歌を詠んだ女性を含む住民の気持ちや姿勢に変化をもたらしたのである。

「リスクの想定が伝え方によって、人を前向きに動かすエンジンにもなり得る、ということを示す例だと言えるでしょう」

## ●防災ゲーム「クロスロード」とは

リスクの想定自体を新たなリスクとしてしまわないための災害リスク・コミュニケーションを模索して、矢守教授が新しく開発したのが、防災ゲーム「クロスロード」である。

阪神・淡路大震災 10 年目を前にした文部科学省のプロジェクトの一環として、矢守教授は被災者や関係者のインタビューを担当。「この貴重な記録を、かたちを変えて活かす手段を考えるべきだと感じたことが、開発のきっかけでした」

クロスロードとは「分かれ道」の意味で、転じて重要な選択や判断を意味する。防災に関わる種々の選択、特に「あちらを立てればこちら立たず」というジレンマを伴う選択が、YES か NO の二者択一の設問形式で提示される。設問はすべてインタビューで聞いた実話に基づいている。

例えばこんな設問だ。「あなたは被災した公立病院の職員。入院患者を他病院へ移送中、ストレッチャー上の患者を報道カメラマンが撮ろうとするのを、そのまま撮影させるか？」

これは公立病院の副師長（当時は副婦長）の実体験だ。報道カメラマンには被災地の実

態を伝える使命がある。特に、被災中心地の情報は伝わりにくく、空白が生じやすいのだが、適切な支援のためにも正しい情報が必要だ。副師長は「それは理解できるけれど、撮影している暇があったら手伝ってほしい」と言って、実際に手伝ってもらったこともあるという。

この副師長は、インタビューで「あとで考えると、被災の当事者は現場の記録を残すことができない。口で伝えても風化していく。事実を記録して後世に伝え、今後の対策に活かすために、こういう人たちも必要なんだと思った」と語っている。

矢守教授は言う。「クロスロードの最大の特徴は、正解がないことです」

防災教育は「正解ありき」で、正しい避難の仕方などを教える。「しかし、何が正解か分からない、初めて出合う難問が次から次へと湧いてくるのが、被災地のリアルな姿。だからこそ、実話として、当事者がどんな行動を取ったのかを知ることに意味があります」

ある神戸市職員は、「防災マニュアルなど役に立たない状況の中、その時その場で、皆で“正解”をつくることの連続だった」と語っている。この言葉に感銘を受けた矢守教授。「せめて事前に、その時その場で皆で“正解”をつくり出す力を培いたい」との思いも、クロスロード開発の原動力となった。

## ●つらい決断をしなくて済むように

矢守教授は、高知県や徳島県、和歌山県など、南海トラフ地震の想定被害の大きい地域の小学校で、クロスロードを使った防災授業を行っている。最近では映像による設問も追加。映像は、東日本大震災の際、釜石市役所前に津波が猛スピードで押し寄せ、人々が逃げる様子を撮影したもので、逃げ遅れそうな高齢者の男性が映し出されている。

この映像に対する設問には、いくつか設定が設けられている。

設定1は「このおじいちゃんを助けに行くか?」というもの。約3割が「助けに行く」、約7割が「助けに行かない」という回答である。

設定2は「このおじいちゃんと、今朝挨拶を交わしたばかりだったとしたら?」。つまり知り合いということ。この場合でも答えに変化はない。

設定3は「自分のおじいちゃんだったら?」。設定1・2でNOと答えた7割のうち、半分以上が助けに行くと言意を変え、というのが一般的なパターンだ。

しかし、設定1・2では助けに行くと言っていたのに、設定3で答えを変更した子が2人

だけいる。どちらも小学5年の女の子で、理由も同じだった。

2人とも、設定1・2の段階で「助けるのは無理かもしれない」と思っている。だから、助けに行くと自分もおじいちゃんも死んでしまう。そうしたらお父さん、お母さんはどう思うだろう。自分だけでも生き残ったほうがいいのか、というのがその理由だ。

「自然災害は、人間関係にインパクトを及ぼすものだからこそ、人との関係において防災を考えてほしい。また、どんな状況にせよ YES、NO を決めるのはつらいこと。そうならないように、今から準備しよう。それが授業を通して子どもたちに伝えたいことです」

## ●一人一人に寄り添った避難訓練

矢守教授が編み出したもう1つの災害リスク・コミュニケーションの手法として、高知県四万十町興津地区で実施している「個別訓練タイムトライアル」がある。

興津地区は避難タワー建設など防災対策を積極的に行っており、子どもたちが防災マップを作成するプログラムでも、発見した課題の改善に向けて、地域住民が工夫をしてきた。その最大の成果が、海沿いに建っていたデイサービス施設と保育園の高台移転である。「これが東日本大震災より前の話というのは、驚くべきことです」

それでも、被害想定に対するあきらめ、あるいは、過去の地震の中で津波の規模が小さかった1946年の昭和南海地震の記憶から「たいしたことはないだろう」という油断や慢心が入り混じり、避難訓練の参加率は他地域よりも高いとはいえ、3割ほどにとどまっている。

自分のこととして捉え、自分の足を使うことで効果を高める避難訓練をする必要がある。言い換えれば、そうした訓練を通じてしか、津波のリスクは伝えられないのではないか。「そんな思いもあり、開発した手法です」

個別訓練タイムトライアルは、文字通り個人で行う避難訓練。訓練者は自宅から高台などの避難場所まで実際に逃げ、その一部始終を地元の小学生がビデオで撮影する。避難訓練と子どもたちの防災教育をセットにした試みでもある。

ビデオ2台のうち、1台は訓練者の表情を、もう1台は周囲の状況を撮影。さらに別の子が「疲れた表情になってきた」「ここはブロック塀が崩れる可能性がある」など、時々状況や気づいたことをメモする。訓練者はGPSを装着しており、何分後にどこにいたが、後から地図上に表示されるようになっている。

以上の結果は、「動画カルテ」と呼ばれる映像にまとめて、訓練者に手渡される。

画面は 4 分割され、カメラ映像や前述の地図が映し出される。地図には津波浸水シミュレーションの映像が、訓練者の実際の動きと重なって表示され、「ここまで逃げた時に、自宅にはすでに津波が押し寄せている」といったことがひと目で分かる。防災の鉄則「敵を知り、己を知る」を、画面上で実現しようというわけだ。

避難訓練をしたことがなく、マンションの 15 階から階段で下りたらどれくらいかかるのか知らない、そもそも自分の足で下りられるか試したこともない、という人は多いだろう。「個別訓練トライアルは、訓練者自らが、敵に対して己はどの程度の力を持っているのか、身をもって試してもらうことができます」

画面には子どもたちのメッセージも表示され、「あきらめずに逃げてほしい」という思いを伝えている。

災害リスク・コミュニケーションは、何を（what）どう（how）伝えるかだけでなく、誰が（who）伝えるかも重要な要素。大切な人が伝えることで、意識は変わる。

「何のために防災の備えをするのか。今一度原点に立ち返り、災害リスク・コミュニケーションの大切さを見直してほしいと思います」。これが矢守教授のメッセージだ。



「対策があれば被害想定にも絶望的になる必要はない。正確な情報が伝わっているか疑問」との参加者の声。「南海トラフ地震による津波高も、岩礁近辺の値なのに、住区域に 30m の津波が襲うと誤解している人もいる。冷静に、正確にリスク・コミュニケーションしていく必要がある」と矢守教授